
雲の上の欠ける月

上葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雲の上の欠ける月

【Zコード】

N1192U

【作者名】

上葵

【あらすじ】

月食を見ようと誘われたが、狭苦しい都会の夜空は分厚い灰色の雲に覆われていた。とはいえ約束を反故するわけにもいかず、彼女が待つているであろう場所へ、僕は向かうことにした。

人間という種族に生まれた僕は淡々と、死なない限り歩みを進める。

田の前に不老不死の薬があつたら飲んでみるのもアリかもしねない。この世の終わりはきっと美しいから。

「あいにく曇つてて、関東近辺じゃまず無理だよ」

その日の深夜、いや正しくは翌日の明け方に皆既月食があると、眩いばかりの笑顔を振りまいて千代は僕の手を握った。

「無理という言葉は体験してから使うべきよ。まだわからないじゃない」

「月食なんて珍しくもない。年に何回はあるでしょ。それに明日は平日だよ」

「なんでも良いから起きててよ。きっとよ」

一方的な口約束だったが、無碍に断ることはできない。

深夜一時を回って、時計の針の音がだけが薄暗い室内に響きわたり。静寂に鼓膜を切り取られたみたいに辺りは静まり返っていた。虫の声もなければ夜風が草木を撫でることもない。丑三つ時の言葉の通り、世界は眠りに落ちていた。

携帯のランプが、ホタルの明滅みたいに、繰り返しメール着信を知らせていた。

一つ折りの携帯を開き、液晶のバックライトに田を細めながら、メールを確認する。

『起きてる?先にいつてるから。無理そなうならシカトしていいよ』
『ごめん、寝てた、と打ち込む前に僕はのっそりと上体を起こして、カーテンを滑らせそっと外を覗いてみた。

外は明るかつた。それが月や星の輝きなのか、ただ単に都会の幻想なのか、僕にはわからない。

カバンに菓子パンと買っておいた缶コーヒー、使うことはないだろうけど念のためサイフと、それから携帯電話をいれる。外着に着替え、家族を起こさないよう注意しながら、こつそりと家を出た。

まだ肌寒い初夏の空気を全身に浴び、空を見上げてみた。夜でも分かるくらい、分厚い雲が広がっている。ため息をつくことはないわかつていたことだ。

それにしても、自分の生きている音を浮き彫りにするかのようなこの静寂は、不思議と高揚感を与えてくれる。靴底がこする音と、国道をたまに通るトラックやバイクの音がなければ異次元に迷いこんだと勘違いしてしまいそうだ。

4年前この辺りは、小高い丘になつていて、公園を抜けた先に子どもたちしか知らない秘密の遊び場があった。

今は公営住宅建ち並ぶ居住区になつてているのだけだけど、4年前は僕らの秘密基地がたしかに存在していた。

「来てくれたんだ」

「まあさすがにほつとけないしね

ヘルメット被つた作業員たちに見つからないよう、基地は一時的に橋の下に移された。橋といつても地面の上にアスファルトが乗せられてあるだけで、見てくれば完全に防空壕だ。

そこに段ボールを敷いて、当時流行ったトレーディングカードゲームで遊んだり、他愛の無い話をしたり、そうこうしている内に僕らは小学校を卒業して、目まぐるしい環境の変化でいつしか秘密基地があつたことさえ忘れていた。

薄情と後ろ指さされようと、幼き日をいつまでも覚えている人はそう多くないだろう。橋の下の防空壕でうずくまる千代はその少数派だった。

「私がここにいるってよくわかったね」

「長い付き合いだし、待ち合わせ場所がどこかくらいはわかるよ」

「懐かしくて死ぬかと思ったよ。基地取り戻せなかつた悔しさも蘇つてくるし」

「バカなこというなよ」

彼女の無邪気な一言でまた思い出が蘇る。開発で住処を追われた動物のように工事で遊び場が奪われた僕らは、いつかかつての秘密基地を取り戻そうと、橋の下で誓いを立てたんだつた。

無理だとはわかつていただけど、アニメや映画の復讐に心踊ると同じように、ひたすらやつもしない奪還劇のシミュレートを繰り返したつけ。

「それにしても残念。空、晴れなかつた」

「だから言つただろ。帰つて寝ろよ」

「まだ一時間あるし、今から晴れるかもしないでしょ。ほら、行こ」

ゆつくりと立ち上がり口角をあげると、丘を手指して歩きだした。街頭は少ないし、暗闇を恐れてもいいものだが彼女の歩みは華やかだつた。

「皆既月食そんなにみたいの?」

「つうん別に」

「なんだよそれ。んじゃなんで夜更かし?早起き?してまで天体観測なんてしようつてのを」

「秘密、秘密」

楽しげに声を弾ませて、節をつけて歌つように彼女は言った。

公園についたとき、6月中旬深夜の空気は仄かな夜明けを孕んでいたように思える。

空には相変わらず、分厚い灰色の雲が広がっているが、今更気にはならなかつた。都会の狭い空の下で育つた千代と僕は一面の星空なんて無縁なのだ。

「みんなどうしてるかなあ」

「みんなって誰？」

「モモやアツコやヒナタや、それから、それから」

「寝てるに決まってるだろ」

「……そういうことが言いたいんじゃないで

公園の隅っこベンチに座って、ぼんやりと夜空を眺める。カバンから取り出した缶コーヒーのフルタブを押し上げ、僕はそれを千代に渡した。

彼女は端的にお礼を述べると氣恥ずかしそうに口をつけた。

「……みんな変わつていちゃうのかなあ」

「なにノスタルジックに漫つてゐるのさ。そんな歳じゃないだろ」「そうだけど、みんな私の事を過去の友達にして忘れてるよね。置いてけぼりにされるみたいで、それは、すごく、寂しい」

彼女の咳きは徐々に小さくなつて薄暗闇にとけていった。

回顧趣味をとやかく言つ気はない。彼女の挙げた名は、かつての友達で仲間で、知り合いで、旧友だ。

僕にとっての現在は一年後に迫りくる高校受験や、別居中の両親のことぐらいで、過去に捨て置いた事柄を広い集めるくらいの余裕は持ち合わせてはいなかつた。

甘い菓子パンを口に加え、僕はそつと隣を盗み見た。公園の端にある街頭の灯りに照らされ微かに窺つた彼女の表情はなんともいえず悲しげだった。

「僕がずっと覚えてるよ」

「え？」

「千代と、いつも皆既用食を拝みにきたことや、みんなで遊んだこと、死ぬまでずっと」

「ほんと? 約束だよ」

「ああ」

パンを頬張りながらじやないと、そんな青臭いセリフを吐けない小心者の僕を許してほしい。それでも彼女の声は差し込む光明のように明るいものに変わった。

「もう二時だね」

「ああ、もうそんな時間か」

ぱつりと呟いて彼女はポケットから、四角い小箱を取り出した。
「千代、それ」

ギョシとして固まってしまう。彼女が取り出したのはタバコの箱と、100円ライター。未成年の僕らが補導されたら真っ先に没収される代物だ。

「内緒で持ってきた」

「肺を悪くするぜ。やめときなよ」

「うん。好奇心から一本、って思ってたけど、」

彼女は言いながら僕にライターとタバコの箱を差し出した。
「こんな気持ちが良い夜に、無理して咳き込む必要はないよね」
受けとってしまったタバコを慌ててカバンにします。

「こんなもの貰つても、僕は吸わないよ」

「だから20歳になつた時、火をつけてよ」

彼女の言いたいことはわからなかつたけど、約束は守るつもりと思つた。

「さ、帰ろうか。今日も学校あるしね」

立ち上がり、千代は僕ら以外誰もいない薄暗闇と戯れるみたいにくるくると回つた。まるで夜明け前を腰布にしているみたいだ。
「皆既月食は見れなかつたけど、夏はもうすぐだね」

「前後の文章が繋がつてないよ」

苦笑いを浮かべ、僕も立ち上がる。

明るみはじめた雲の切れ間に欠けた白い満月を見た気がした。
彼女は空を指差して遠くを見つめ、

「ほら、夜明けだよ」

と呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1192u/>

雲の上の欠ける月

2011年6月17日00時41分発行